

Factors promoting sense of coherence among university students in urban areas of Japan : individual-level social capital, self-efficacy, and mental health

著者	間戸 美恵
著者別表示	Mato Mie
journal or publication title	博士論文要旨Abstractおよび要約Outline
学位授与番号	13301甲第4613号
学位名	博士（保健学）
学位授与年月日	2017-09-26
URL	http://hdl.handle.net/2297/00049695

doi: <https://doi.org/10.1177/1757975917691925>



学 位 論 文 要 旨

学位請求論文題名

Factors promoting sense of coherence among university students in urban areas of Japan: individual-level social capital, self-efficacy, and mental health

(日本の都市部の大学生における首尾一貫感覚の促進要因：個人レベルのソーシャル・キャピタル，自己効力感，およびメンタルヘルスに焦点をおいて)

著者名・雑誌名

Mie Mato, Keiko Tsukasaki

Global Health Promotion, First Published April 6, 2017 (刊行予定)

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻

看護科学 領域

地域・環境保健看護学 分野

学籍番号 1329022031

氏名 間戸 美恵

主任指導教員名 塚崎 恵子

副指導教員名 城戸 照彦

副指導教員名 表 志津子

研究背景

大学生の時期からの生活習慣の改善に向けた働きかけは、中年期以降の生活習慣病の発症を予防するために重要である。首尾一貫感覚(SOC)は健康を予測する個人の志向性を表す概念として注目されている。健康生成論によると、SOCが高い人は、自身が持つ様々な資源(汎抵抗資源)を活用して適切に対処しようとするため、良い健康関連行動をとりやすい。つまり、豊富な汎抵抗資源によってSOCは促進し、より適切な行動を選択することに繋がるとされている。よって、健康な生活習慣を推進するための1つの方略として、個人のSOCを高めることが考えられる。しかし、大学生においてSOCを促進する要因は明らかでない。

目的

大学生においてSOCを高める汎抵抗資源を明らかにすることを目的として、SOCとソーシャル・キャピタル(SC)、自己効力感、及びメンタルヘルスとの関係を検討する。

方法

関東及び近畿地区の大学で、調査協力に同意を得た8校に在籍する9学部の3、4年生614人を対象として、2014年5月～10月に郵送による無記名自記式質問紙調査を実施した。調査項目は属性(年齢、性別、専攻、家族構成、現在地の居住年数、同居状況、出身地域)、個人レベルの認知的及び構造的SC、自己効力感、メンタルヘルス(健康関連QOL SF-36v2の下位尺度)、SOCである。属性、認知的及び構造的SC、自己効力感、メンタルヘルス、SOCの二変量の関連性についてはt検定、一元配置分散分析、welch's検定、多重比較法による検定、pearson's積率相関による分析を行った。SOC-13スケールの因子構造を検討するため、Cronbach's α の算出、構造方程式モデリングによる確認的因子分析を行った。以上の分析を踏まえて、SOCの関連要因を明らかにするため、SOCを従属変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。さらに、大学生のSCとSOCは地域環境の影響を受けやすいと考えられることから、出身地域別に二大都市圏と他の地域に分類し、SOCにおける認知的SCと構造的SCの関連性について、二元配置分散分析を行った。本研究は金沢大学医学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

結果

517名から回答を得て(回収率84.2%)、そのうちの443名を分析対象とした(有効回答率85.7%)。平均年齢は 21.1 ± 1.2 歳だった。SOCの平均値は、男性 50.5 ± 10.1 点、女性 50.4 ± 8.9

点であり、性別による有意差はみられなかった。SOC の因子構造は、修正なしのモデルで I-T 相関係数が著しく低い値を示す 1 項目を除いた 12 項目、2 次 3 因子モデルにおいて、最も妥当な適合度を示した (Cronbach's $\alpha = 0.76$, CMIN/DF = 2.532, GFI = 0.953, AGFI = 0.931, CFI = 0.910, RMSEA = 0.059, AIC = 184.186)。SOC と認知的 SC との間に弱い有意な正の相関がみられ、自己効力感、メンタルヘルスとの間にそれぞれ中程度の有意な正の相関がみられた。自己効力感と構造的 SC との間に弱い有意な正の相関がみられた。SOC を従属変数とし、年齢、性別、単変量解析で関連が認められた属性 (専攻、同居状況、現在地の居住年数、出身地域) を含め 10 項目を独立変数として重回帰分析を行った結果、SOC は年齢 ($\beta = 0.10$, $p = 0.004$)、認知的 SC ($\beta = 0.22$, $p < 0.001$)、構造的 SC ($\beta = -0.08$, $p = 0.033$)、メンタルヘルス ($\beta = 0.35$, $p < 0.001$)、自己効力感 ($\beta = 0.40$, $p < 0.001$) で説明された ($p < 0.001$, 調整済み $R^2 = 0.48$)。出身地域が二大都市圏の学生では、認知的 SC と構造的 SC の組合せによる SOC への関連性において交互作用がみられた ($p = 0.024$, $\eta_p^2 = 0.02$)。

考察

認知的 SC、構造的 SC、自己効力感は、SOC の汎抵抗資源として働き、同様に、良好なメンタルヘルスは強い SOC を促進する可能性が示された。また、出身地域と現在の居住地域が都市部の学生では、認知的 SC と構造的 SC がともに高い者は SOC が低下する可能性が示された。これらのことから、健康な生活習慣の推進を目指して、大学生の SOC を高めるためには、ソーシャル・キャピタルとしての人との信頼や協力関係、ネットワークの広がり、個人の特性としての効力感、精神的に健康であること等の心理社会的要因を考慮して、全学生において環境を整えていくことや各個人を支援していくことが必要であると考えられる。

結論

SOC と認知的 SC、構造的 SC、自己効力感、メンタルヘルスとの関連性が示された。さらに、出身地域と現在の居住地域がともに二大都市圏の学生では、認知的 SC と構造的 SC がともに高いことは、SOC に抑制的に働く可能性が示された。